純白で。

コナン1412

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
純白で。

【Ｎコード】
Ｎ５０４１Ｙ

【作者名】
コナン１４１２

【あらすじ】
コナン君たちが二年生になった頃の話です。
きっかけは歩美ちゃんが持ってきた割引券。ちょっとした旅行からコナンの心は変わっていく。カップリングはコ哀です。

色違いワンピース

8月6日
まだ夏休みは始まったばかりだ。

阿笠邸にて。

今日は仲良し5人組でショートケーキを食べている。

「ねぇ、歩美の話聞いて！大ニュースがあるの！」

今までケーキに夢中だった元太が顔を上げる。

「おっ！なんだ、歩美。大ニュースって。うな重についてかぁ？」
「違うよ元太君。歩美の大ニュースってゆーのはぁ…」

と言いながら歩美は自分のバックをあさる。
そして、何やら横長の封筒を取り出した。

「じゃ～ん！ホテルの割引券！お母さんにね、『皆で行ってきなさい』って渡されたの。」
「そこのホテル、僕行ったことあります！とても綺麗なホテルで、近くに動物園があります！」
「わぁー、すげーな！なあ、光彦。そこのホテルではうな重食えるのか？」
「…それは分かりません。」

「ねえ、コナン君も哀ちゃんもどお？皆で行こうよ！」
「あぁ。俺は行けるぜ。」
「私はパス。」
「おい、灰原…」
「何？別に強制じゃないんでしょ？それに、行かない方がいいのは貴方もじゃないの？いつも事件を呼んで子供達を危険な目に合わせないためにも。」
「……にゃろ～」

すると、急に歩美が悲しそうな目になる。

「えぇ～？そんなぁ。行こうよ哀ちゃん。コナン君も！これ、1枚2人までで、3枚もらったの。博士も入れて6人でぴったりだよ？勿体無いよ…。事件だって、歩美ぜ～んぜん気にしてないんだから！」

ここまで言われたら、どうせ拒否権など無いのだ。

「えぇ。分かったわ。行きましょう。ところで博士には…」
「もう言ってあるよ！博士も一緒に行ってくれるって！」
「…そう。随分と準備がいいのね。」
「だって、それくらいしておかないと哀ちゃんが一緒に行ってくれないと思ってたんだもん。」
「……」
「でも良かったぁ！哀ちゃんが行ってくれないと、女の子は歩美1人だけになっちゃうから。楽しみだね？」
「そうね。」

ー当日ー

『ピンポーン』

朝早く、阿笠邸の玄関のチャイムがリビングに鳴り響く。
ソファで珈琲を飲んでくつろいでいた哀は玄関のドアを開ける。

「あーいちゃん！おはよ～！」
「おはよう。あら、随分と早いのね。」
「えへへ。楽しみで走って来ちゃった。」
「そう。ところで、後の3人はどうしたのかしら？」
「元太君と光彦君は途中まで一緒に走ってたんだけど、疲れちゃったみたい。もう少しで来ると思うよ。コナン君は待ち合わせしてないから知らなぁい。」
「分かったわ。彼、時間までに来るかしら…」

すると、何やら楽しそうに歩美が近寄ってきた。

「哀ちゃん、昨日の……あの洋服は？」
「あぁ。あれなら、明日着るわ。」
「えぇっ？そんなぁ～。歩美は今日着て来たのに…。哀ちゃん、今着替えてきてよ！」
「……分かったわ。」

そう言って哀は地下室に着替えに行った。

すると、勢いよく玄関のドアが開いた。

「歩美、速すぎだぜ…。」

「元太君がちゃんと走らないからですよ。」

と、元太と光彦が入ってきた。

「あれ、コナン君と灰原さんは？」

「哀ちゃんは今着替え中。コナン君はまだだよ。」

「おせーな、アイツ。」

「もうそろそろ時間になっちゃうよ。」

その頃、コナンは…

「……ハァ。早すぎなんだよ。６時半に集合とか…。」

なんてブツブツ言いながら重いリュックを背負って阿笠邸に向かっていた。

いつもより３０分早く起きるのも、コナンには苦痛だったのだ。

しかし夏の朝は清々しく、その空にはもう太陽が輝いていた。

『ピンポーン』

阿笠邸の目の前でコナンはチャイムを鳴らした。
もう、皆は来ているだろう。

『はい。』

灰原の声だ。
何故か一瞬ドキッとした。
声を聞いただけなのに。

「あ、俺。」
（わかってるくせに…。）

ガチャガチャと鍵を開ける音がした。
なんとなくドアの手前を這っているアリを見ていた。

―そして。
少し開いたドアから見えた白い裾が…

―白？

―あぁ。歩美ちゃんか。

「おはよう歩美ちゃ……」

顔を上げながら言っていたが、途中で言葉が止まった。
目の前に立っていたのは歩美ちゃんではなく…

「は、灰原……？」

目の前に立っている灰原はいつもと違って、今日は膝下で半袖のワンピースだった。

純白で。

綺麗で。

眩しくて。

思わず目を細めてしまう程。

「あら、おはよう。でも残念でした。私は吉田さんではないわ。期待していた相手と違って悪かったわね。」

灰原は奥へ行ってしまった。

俺は中に入りドアの鍵を閉めて、リビングへ向かった。

「あ、コナン君。おはようございます。」

「コナン君おはよう！」

「おいコナン、おせーぞ！」

「悪りぃ。ちょっと寝坊しちまって。」

皆が俺にあいさつをしてくれたのに、灰原だけはソファに座って雑誌を読んでいる。
あ、さっきあいさつしたんだった。
でも、何故かソワソワする。
声を掛けて欲しくて。
別に好きな訳ではないのに。

すると、歩美が近寄ってきた。

「ねぇ、どお？このワンピース。昨日、哀ちゃんと色違いで買ったんだ。歩美がピンクで、哀ちゃんは白！２人でお揃いなんて歩美、嬉しくって！今日早速着てみたんだぁ！似合う？」

歩美はクルッと回ってみせた。
ピンクの裾はチラチラと白いフリルを見せながらキレイに円を描いていった。

俺が反応に困っていると、灰原がこっちを見てクスクスと笑っていた。

「あぁ。いいんじゃねぇか？」

これ位の事しか言えない。
しかし、歩美は顔を真っ赤にして本当に嬉しそうだ。

「なあ、博士。コナンも来たし、もうそろそろ行かねぇか？」
「そうじゃのぅ。」

もうそろそろか。と、下ろしたリュックを再び肩に掛ける。

その後、皆の荷物を車に乗せて俺たちも車に乗った。
元太は助手席。
灰原は窓際がいいと言っていたから、窓際の席。
光彦は灰原の隣がいいらしいが、歩美ちゃんの隣でもありたいと思っているのではないのか。
そして、歩美ちゃんは俺の隣がいいと言っている。
結果、左から灰原、光彦、歩美ちゃん、俺。

灰原が隣だと偽小学生同士、話が出来ると思っていたが、流石に歩美ちゃんとなると…。

騒がしい車の中、俺は窓の外を見ていた。
灰原が窓際がいいと言った訳が分かる気がする。
朝早く起きたせいか、俺はいつのまにか眠っていた。

「君。――――ナン君。――――コナン君、着いたよ！」
「――――んにゃ？――――おぅ。もう着いたのか。」
「うん！コナン君ったら、寝てる時にイビキかいてたよ！」
「ん、そうかぁ？」
「うん！」

どれ位寝ていたのだろうか。
ここは何処だろう。
都会ではない事だけは確か。
あまり人が多くはない。

車から降りて目を擦る。
ここは……動物園か。
そういえば、光彦がホテルの近くにあるって言ってたっけ。
ってことは、ホテルはもう近いのか。

博士は受け付けでチケットを買っている。
元太と歩美ちゃんと光彦は、相変わらず元気よくそこら辺を走り回っている。
灰原はというと。
木陰で風と戯れていた。

真っ白な鐔の広い帽子を被って、少しヒールのある白いサンダルを履いて。

灰原の向こうには地面と青空だけ。

まるで絵になりそうなくらい、綺麗な景色で。

綺麗で。

本当に綺麗で。

白い帽子

俺は知らないうちに灰原に見とれていた。
あれ？そういえば、洋服は歩美ちゃんとお揃いなのに歩美ちゃんはあんな帽子被ってたっけ。
フと歩美ちゃんの方を見てみる。
やっぱり彼女は被ってない。
別にそんなに気になる訳ではないのに、なんとなく話したくて聞いてみた。

「どうしたんだよ、その帽子。」
「どうしたって…どういうこと？」
「だから、歩美ちゃんはそんな帽子被ってないから。」
「あぁ、これはフサエさんから貰ったのよ。」

『これ』と、灰原は帽子の鐔の端を持って更に深く被った。
彼女の顔は見えなくなり、緋色の髪が風に揺れている。

「最近フサエさん、よく博士ん家来るもんな。」
「えぇ。」
「フサエさんと上手くいくといいんだけど…。」
「そうね。」

ザワザワと木の葉と葉のぶつかる音がする。
灰原は右手で帽子が飛ばないように押さえている。

「彼女、とても優しいの。」

『彼女』とはフサエさんのことだろう。

「この前、近くのショッピングモールに連れて行ってもらったの。
そしたら、『私のこと、母親のように親ってくれたら嬉しいわ。』
って。その日は沢山洋服を買って、あと美味しいアイスもご馳走し
てもらったわ。」

そう話す灰原の顔は穏やかだ。

「楽しかった…」
「……そうか。良かったな。」

俺がそう言った直後に、歩美ちゃんが俺たちを呼んだ。

「哀ちゃーん！コナンくーん！行くよ～！」

声が響く。
歩美ちゃんは入園口の手前にいた。
その隣に博士。
元太と光彦はもう中に入った様だ。

「ほら。行くわよ。」
「あぁ。」

俺と灰原は入園口へ歩いて行った。

中に入ると、まず正面には大きな園内の地図。
そして、右に植物園。
左にはお土産売り場。

「何から見るかの？」
「ますお土産からだろ！」
「元太君、お土産は一番最後に見るものですよ。」
元太がボケで、光彦がツッコミ。
いつかこの２人、お笑い組んじまうんじゃないか、と思うくらい定番の会話となっている。

「ねぇ、コナン君は何から見たい？」
「ん？適当に手前から見ていけばいいんじゃねぇか？」
それ以外何があるというのだ。

とりあえず、元太が植物園など見なくてもよいと言い張るので、そこは見ずに真っ直ぐ歩いて行く。
すると、ふれ合い広場が現れた。
どうやらここでは、兎やモルモット、ヒヨコ、鼠を触ることが出来るらしい。
俺たちはふれ合い広場に入って行った。
中には多くの子どもたちが家族と共に動物とふれ合っていた。
ふれ合うというより、人間が一方的に触っているのだか…。
俺たちは博士が座った黄色の小さなベンチに荷物を置き、動物を触りに行った。
元太と光彦と歩美ちゃんはモルモットを、俺と灰原は兎を触っていた。

兎は大人しく撫でられていた。
俺が抱いているのは真っ黒な兎。
毛並みが綺麗で、黒くクリクリした目が可愛らしい。

一方、灰原は兎を抱かずにカゴに入れたまま撫でている。
こちらは真っ白な兎。
目は赤。
同様に、毛並みは綺麗だ。
灰原に撫でられている兎は心地が良いのか、目蓋が重そうだ。

「灰原の撫でてる兎、なんだか眠そうだな。」
「そうね。貴方と違って撫でる場所がいいんじゃない？」
「（可愛くね～奴）そ、そうかぁ？」
「そうよ。」

少々悔しかった俺は、灰原と同じ様に、同じ場所を撫でてみた。
しかし、兎は真ん丸な目をパチクリさせて、眠そうな気配は一切感じられない。
それを見た灰原はクスクスと笑いやがる。

「貴方のことが嫌いなんじゃない？」
「なんだとォ？」
「冗談よ。」

灰原はまたクスクスと笑った。
白い帽子としゃがんだスカートの裾が灰原が笑うのに合わせて小刻みに揺れている。

ふれ合い広場を出ると、目の前にはキリンが。

「わぁ～。キリンさん、首ながーい！」
「すげーな！」

そう言うと、歩美ちゃんと元太と光彦はキリンの方へ走って行った。

「ホント、元気ね。あの子たち…。」

「あぁ。そうだな。」

「そうじゃのぅ。」

灰原は相変わらず冷めた目だ。

キリンを見るのに飽きた3人は鳥のコーナーへ行き、その後「爬虫類館」と大きな看板のある建物に入って行った。

俺たち3人もその後を追う。

俺たちが爬虫類館に入ると、ヘビを見ている元太達を見つけた。

どうやら光彦が元太と歩美ちゃんに色々と説明をしているようだ。

「やっと追いついた。オメーら見ていくスピードが速いんだよ。」

「オメーらが遅せぇんじゃねーかぁ。」

（あのなぁ…。ちっとぁこっちのことも考えろよ……。）

なんて思いながら俺は、自分の目の前にある緑色のヘビを見た。

重そうな一本線の身体を、器用に木に絡めて眠っている。

「何してるの？行くわよ」

気がついて、周りを見る。

「博士たちなら、もう見えない程向こうに行っちゃったわよ。早く行くわよ。」

「あ、あぁ。悪りぃ。」

（き、気づかなかった…）

爬虫類館を出ると中が暗かったせいか、外が眩しすぎて、一瞬目を瞑る。
更に、息苦しい程の暑さ。
太陽が俺たちを睨みつけ、湿気が服の中に溜まって苛々する。

『シューッ』

何かが背中に吹きかけられ、途端にスーッと冷たさが背中を伝う。
驚いて後ろを見ると、
「シーブリーズよ」と言って灰原が自分の腕にも付けていた。
石鹸の様な、とてもいい香りがする。
女の子らしい香りだ。
ただ、灰原がその様な物を使っているのには驚いた。

「おまえがそんな物使うなんて、珍しいな。」
「たまたまよ。貰ったの。私も最初は抵抗があったけど、使ってみると結構便利だから。」
「ふーん。」

すると彼女は俺の顔に、そのスプレー缶を向けた。
（ヤベッ！やられる！）
そう思って俺は、ギュッと目を強く瞑った。

「シューッ」

スプレーが噴射した。
と言っても、俺が確認出来るのは音だけだ。

顔が濡れたわけでもなければ、香りがするわけでもない。
俺は恐る恐る目を開けた。
すると、スプレー缶はまだ顔の目の前に。
正直、めちゃくちゃビビった。
その様子に灰原はクスクスと笑いながら言う。

「今のスプレーの音、私が口で言ったのよ。」
「……え。……ってか、はぁぁぁ～？マジでビビったぜ…。」
「そう？嬉しいわ。」
「ハァ…。嬉しくねぇー。」

そして、また灰原はクスクスと笑う。
それに俺もつられて笑った。

本音

あ、まただ。
哀ちゃんばっかりずるい。
コナン君と仲良さそうに並んで。
歩美だって、コナン君と二人で話したいよ。
だって、コナン君のこと好きなんだもん。
哀ちゃんだって、歩美がコナン君のこと好きなの知ってると思うよ。

なのに、ほら。
遠くから見てると、二人は私たち三人を見守るお父さんとお母さんみたいなの。
私たちと違って、二人は何でも知ってるんだよ。
学校に行く時だってね、歩美たちの後ろで難しいお話してるの。
二人が何のこと話してるのかわかんないくらい。

でも、今日、こんな思いにも決着つけるんだ。
昨日、哀ちゃんと約束したもん！

昨日ね、ワンピースを買った後、歩美と哀ちゃんで近くの喫茶店に行ったの。
それでね、歩美、言ったんだ。

「明日、ホテルで歩美、コナン君に告白する！」

って。
その後、哀ちゃんってば目を真ん丸にして、動かなくなっちゃったの。
だから歩美が

「哀ちゃん？」
って声掛けてあげたんだ。
そしたら、お母さんみたいに笑って、
「頑張ってね。」
って言ってくれたんだ。
でも、その目はとても悲しそうで。
哀れまれてる様な感じがして。

やだ…。
そんな目で見ないでよ。
もう、結果を見透かしてるような。
『貴方、フられるわよ。』って。

歩美、哀ちゃんが次に何て言うのか怖くなってきちゃって、
「明日、お揃いのワンピース着て行こうね！」
って哀ちゃんの顔見ないで言って帰っちゃった。

本当は今日、怒ってるかもしれないから哀ちゃんと顔合わせるの、怖かったんだ。
でも、哀ちゃんは朝から優しく声掛けてくれた。
安心しちゃった。

「吉田さん？」
「わっ？」

「え？」
「びっくりしたぁ～。哀ちゃん、急に声掛けてくるから…。」
「ごめんなさい。驚かせるつもりは無かったの。」
「ううん。大丈夫。」

いつのまにか、私は動物園のレストランの前にいた。

「入りましょ。吉田さん。」

「うん！」

中はすごく混んでいて、待ち時間は長くなるなりそうだった。
私は哀ちゃんと一緒にトイレに行った。
トイレはとてもキレイで、誰も居なかった。

「あの、哀ちゃん…。」

「何？」

「…哀ちゃん、昨日はいきなり帰っちゃったりして、ごめんね！」

哀ちゃんは昨日と同じ様に、真ん丸な目をした後、お母さんみたいな笑顔になった。

「大丈夫よ。吉田さん。気にしないで。」

「良かったぁ。あ、それと、哀ちゃんにお願いがあるんだけど……。いいかなぁ…？」

「いいわよ。何かしら？」

「……あのね、今日歩美が告白する時に、コナン君をさりげなく連れて来て欲しいの！」

「分かったわ。」

「本当に？ありがとう？それと、コナン君にお手紙渡すんだけど、内容はこれでいいかなぁ…？読んでみて。」

哀ちゃんに手紙を渡す。
ちなみに、手紙の内容はこうだ。

コナンくんへ

いきなりだけど、歩美はコナンくんのことが、大すきです！
コナンくんがてんこうしてきたときから、ずっとすきです。
コナンくんがそばにいると、ドキドキが止まりません。

コナンくんは歩美のこと、どうおもっていますか？

歩美より

「で？どう？」
「ええ。とても吉田さんらしくていいと思うわ。」
哀ちゃんは手紙を封筒に入れて、歩美に返した。
「ありがとう？」
私はそう言って封筒を受け取った。

些細なこと

トイレから出てきても博士たちはまだ順番待ちをしていた。
吉田さんは真っ直ぐに江戸川君のところへ走って行った。
彼女は両手を江戸川君の腕に絡ませて顔を紅くしながらも楽しそうに話している。
本当に子供は素直だ。

「ねぇ、博士。私たちはあとどのくらいで席につけるのかしら？」
「おぉ、そうじゃな。」
そう言って博士は受付まで行って帰ってきた。
「次じゃよ。」
「そう…。ありがとう。」

それから5分も経たないうちに席へと案内された。
哀は博士の隣に座った。
そして。
「円谷君、私の隣に座ってくれるかしら？」
もちろん歩美のためである。
「えっ、あ、はい！喜んで！」
そう言って光彦は哀の隣に腰掛ける。
「はぁ？なんでたよ。いつもならそこは俺だろ？」
哀は『ハァ…』と溜息をつく。
「別にいいじゃない。元から決まっていた訳じゃあるまいし。私が円谷君に隣に来て欲しかっただけよ。悪い？」
光彦の顔が紅くなる。
「貴方は吉田さんの隣に座りなさい。」
歩美の顔が紅くなる。
「はぁ？なんでたよ。」

「早く座りなさいよ。もう皆座ってるんだから。迷惑よ。」
「……わぁったよ。」
すると、光彦が申し訳なさそうに腰を浮かせてコナンに言う。
「…あの、席代わりましょうか？」
それを聞いたコナンは歩美の隣に座りかけていたがスッと立った。
「え？いいのか？うぉし！サンキュー光彦！」
「はい。」
コナンは光彦の居た席にドカッと座る。
「ちょ、円谷君？」
「折角誘って頂いたのにすいません、灰原さん。いつもなら灰原さんの隣はコナン君なんで…。」
「え…えぇ。（席を決めるだけでこんなに時間がかかるなんて、情けないわね…。）
哀は歩美の方を向いて『ゴメンなさい』と口を動かした。
歩美は『大丈夫だよ、ありがとう』と口を動かしていた。

「ところで、何故貴方は吉田さんの隣に座らなかったの？」
「それを言ったらなんでおまえも急に光彦の隣がいいとか言い出したんだよ。」
「まずは私が聞いてるの。」
「何でって…。何でだろ。まぁ、歩美ちゃんの隣より灰原の隣の方が気持ちが楽だし？」
「そうかしら？貴方の場合は本物の小学一年生と一緒に居ても楽しそうだけど？」
「まぁ、そうだけど…。やっぱり灰原と居る時の方が楽しいんだ。」
「…へぇ～。」
哀はコナンをジト目で見る。
「ん？あんだよ？」
「別に。」

哀はそう言うとメニューを広げた。
「それで？」
「何よ。」
「何でおめぇは光彦の隣が良かったんだよ？」
「気分よ。」
「嘘吐け。」
「嘘。」
コナンは哀をジロリと見る。
「理由。教えろよ。」
「あら、嫉妬？」
「ちげーよ。」
「じゃ、聞かないで。」
「何でたよ。教えろよ。」
「探偵でしょ？推理すれば？」
「無理に決まってんだろ…。」
「じゃぁ、残念。」
「んなこと言わねぇで、教え…」
「哀ちゃんは何食べたい？」
コナンの声は歩美の声に遮られてしまった。
「ん…。そうね…、私は珈琲とサラダにするわ。」
「え？哀ちゃんそれだけ？」
「そうよ。」
「ダメだよ、もっと食べなきゃ。」
「いいのよ。あんまりお腹空いてないし。それに、夕飯はホテルでバイキングでしょ？そこで沢山食べればいいじゃない。」
「そーだね！じゃぁ、歩美もジュースとサラダだけにしよーっと！」
「そんなことしなくても、吉田さんは今食べたい物を沢山食べればいいのよ。」
「どうして？」
「私はお腹空いてないって言ったけど、吉田さんは空腹でしょ？そ

うゆう時は食べた方がいいのよ。」
「そっかぁ！じゃぁ歩美、グラタンとコーンスープ！」
「俺、ハンバーグ～♪」
「僕はドリアで！コナン君どうします？」
「ん～、俺まだ考え中。」

＊

「ふぅ～。腹一杯だぜ！」
「も～、元太君は食べ過ぎなんですよ～。」
「え？そうかぁ？」
「もぅ～。元太君のお腹凄過ぎ！」
元太が自分の腹を見る。
「へへ、やべぇ…。」
「ねぇ博士、もうそろそろ此処出よう？」
「ぁ、じゃが、哀君がまだ…。」
哀は運ばれてきたメニューに殆ど手を付けていない。
「灰原？もういいのか？」
「…えぇ。こめんなさい博士。」
「大丈夫じゃ。では行こうかの。」
「行こう！」
「行きましょう！」
「行こうぜ！」
「あぁ！ほら、灰原も…。」

「へ？あ、…えぇ！行きましょう！」
哀がそう言って立ち上がったその瞬間…

「は、灰原？」

コナンが倒れそうになった哀を咄嗟に支える。
しかし哀はそのまま目を瞑ってしまった。
「おい！灰原！どうしたんだよ！しっかりしろ！」
「哀ちゃん！」
コナンが哀の額に手を当てる。
「やべぇ、すげぇ熱だ…。…博士。」
「…どーすんだよ、博士。やべぇじゃん。」
「元太君たちは此処で待っとれ。わしが哀くんをホテルに寝かせて来る。」
「え～、俺、動物見てたいぜ。」
「そうじゃのぅ。じゃ、会計を済ませて来るから、コナン君ちと哀君をお願いできるかの？」
「あぁ。なぁ、博士。俺も連れて行ってくれないか？」
「何を言っとるのじゃ。きみは此処で哀君をみて…」
「今じゃなくて！ホテルにだよ。灰原一人でホテルに残しておくなんて不安だ。」
「あ、あぁ。そうじゃのぅ…。」

「なら、私も行く！」
「え？歩美ちゃん？な、なら僕も！」
「え、おい！光彦もかよ…。じゃ、じゃぁ俺も！」
「なっ、オメーらあんまり大人数で行っても灰原起こしちまうだけだぞ？」
「なら、私を連れて行って博士！」
博士はどうしたらいいか、オロオロしている。
「女の子同士の方が、哀ちゃんが着替えたりするのに都合いいと思うよ？」
「そうじゃのぅ。悪いがコナン君たちには此処で待っててもらうぞい。」
そう言って博士は会計に行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5041y/

純白で。

2012年1月6日16時46分発行